

# 敦煌莫高窟第 285 窟西壁星宿図における日天・月天の戦車

大平 理紗

## 1. はじめに

馬車は戦場のみでなく、パレードにおいても主役の威儀を示すために重要な役割を果たす。古代中国において車とその制度は、服飾にならび、礼制の重要な要素の一つとして整えられていた。しかし三国時代以降、とくに魏晋南北朝の車については実物資料が遺存していないなどの原因から不明瞭な点が多い。筆者は以前、西晋から北朝にかけての墓に副葬される腕付方椅子形の双轆式車模型について検討をおこない、もとは西晋の異民族統御官が用いたと思しい車が、十六国期に珍重され、北魏から北齊の皇帝乗輿に採用されたことを論じた（大平 2025 予定。以下、「前稿」）。ところが、この椅子形の車は唐皇帝へは受け継がれなかったらしい。小稿ではさらにこの椅子形の車および北周から唐に継承された高い較（手すり）をもつ車について、敦煌莫高窟をはじめとする壁画にその図像を探し、両者がどのような性格をもっていたのかを探りたい。とくに敦煌莫高窟第 285 窟西壁星宿図には、日天・月天の乗る車として、椅子形の車の側視形が描かれているが（図 1-1・2）、当窟は北壁に西魏大統 4 年（538）の紀年銘をもち、西壁壁画には西域の色濃い影響が指摘されている（檜山 2020 ほか）。どのようにして椅子形の車が描かれるに至ったのか、その背景が鍵となるはずである。

## 2. 敦煌莫高窟第 285 窟西壁星宿図とスーリヤの戦車

### （1）敦煌莫高窟第 285 窟西壁星宿図の解釈

当窟は、西壁の壁画と天井の周縁部のみ西域北道のインド・イラン様式の仏教石窟壁画に近い絵画様式で描かれており、さまざまなインド系神格像が如来像と禪定比丘像を取り囲むという独特の構図をもつ。インド系神格群像の頭上には計 12 体の天部像が描かれ、その頭上に带状区画が設けられ、人物像を描きこんだ計 15 の白い円形が列んでいる（図 1-3・4）。この带状区画の左端は 4 頭だて馬車に乗る日天（スーリヤ）、右端は 2 匹以上のハンサ鳥を駕する車に乗る月天（チャンドラ）に、それぞれ比定される（賀 1990 ほか）。近年、日天・月天に挟まれる人物像について説得力のある新解釈を提示した檜山智美は、これらが北斗七星と昴宿であり、さらに、

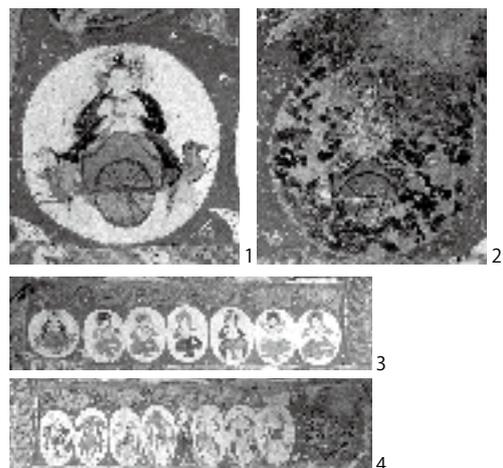


図 1. 敦煌莫高窟第 285 窟西壁星宿図  
1. 日天（スーリヤ） 2. 月天（チャンドラ）  
3. 星宿図南半 4. 星宿図北半

西壁壁画全体ひいては天井壁画は、諸教混淆した習合的な内容をもつ仏教經典を視覚化しており、儒教・道教・仏教に、さらにインド由来の神格像をも取り入れた、言わば敦煌版の「四教合一」思想を石窟内に表現することが、当窟の究極的な意図であると結論づけた(檜山 2020)。さらに檜山は、日天・月天、特にその車の表現形については、日天の馬車の前方に車輪が一つのみ描かれているのはインドのスーリヤ図像を踏襲した表現であり、チャンドラをハンサ鳥を駕する車に乗った姿で表現するのは中央アジアの図像伝統を継承したものであると指摘している。そこで、以下ではまずインドと中央アジアで日天・月天の乗る車の図像がどのように継承されてきたか、そしてインドや中央アジアの図像との共通点や相違点を、既往の研究をたどりながら概観しよう。

## (2) 戦車に乗るスーリヤの図像

### ① インドのスーリヤの例

最も早い擬人化されたスーリヤの表現は、前3世紀後半から1世紀のマウリヤ朝とシュンガ朝の間のものである。クシャーーン朝以前の戦車に乗ったスーリヤ像の特徴は、4頭だて馬車チャリオットに乗り、正面または3/4正面観で表されるが、これは早期のギリシャのヘーリオス神のイメージに基づいている(Gail 1978)。とくに、ボードガヤーのレリーフにみえる正面性の戦車に乗った太陽神像の形式はインドのスーリヤの基準的な形式となっている(Zhu 2006)(図2-1)。馬車に乗る太陽神の正面性描写は、紀元前以来ロシア南部からイラン、そしてユーラシアの東西に広く流布しており、インドのスーリヤ図像もその一環として理解されるという(宮治 2010)。これはパルティアやサカ族などイラン由来のコンセプトである可能性が指摘される(Goldman 1988)。さらに、正面性・左右対称性の描写は、古くルリスタン青銅器に見出されるが、とりわけパルティア美術の顕著な特徴であり、一組の馬が左右対称形に広げられた形式をとる馬車の表現を西アジア・パルティアの正面性描写の伝統とみる意見もある(宮治 2010)。インドのスーリヤ図像はこうした特徴にヘレニズムの馬車に乗る太陽神のイメージが融合して成立したと考えられるが、単なるコピーというわけではなく、これらの奇妙

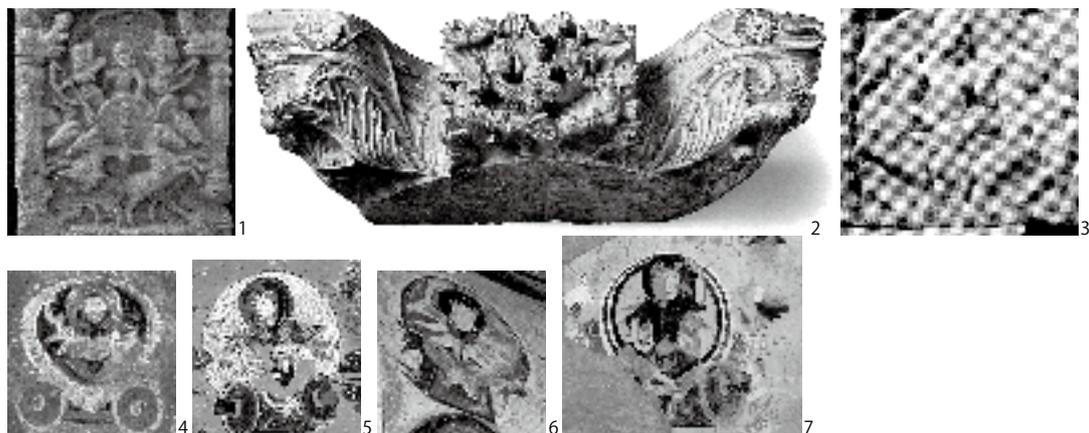


図2. インド・中央アジアの戦車に乗るスーリヤ(もしくはチャンドラ)図像

1. スーリヤ(ボードガヤー、前1世紀)
2. スーリヤ柱頭(ガンダーラ、2~3世紀)
3. スーリヤ像(ガルワー、5世紀)
4. キジル第171窟スーリヤ
5. クムトラ第23窟スーリヤ
6. キジル第17窟スーリヤ
7. キジルガハ第11窟チャンドラ

な特徴として、車輪一つのみが描写されることが指摘されており、これはヴェーダの内容を反映しているという（Markel1995）。

クシャーン朝のガンダーラにおいてもその図像形式は継承され（図 2-2）、マトウラーでも主神の姿勢や服装に変化が生じるものの、正面性描写の 4 頭だての馬車に乗る太陽神という形式を踏襲する。その後、スーリヤの馬車は 7 頭だてとするものが現れるが（図 2-3）、この形式はクシャーン朝時代のガンダーラとマトウラーの双方で、同時代の図像の変化と連動して出現したことが指摘されているほか（Frenger 2020）、グプタ朝下のマトウラーで転換を迎えたものであり、インドの伝統の復興であると同時に、服装には新たな中央アジアの影響がみられるとされる（宮治 2010）。

## ② 中央アジアのスーリヤ像

戦車に乗る擬人化されたスーリヤの図像は、インドと敦煌をつなぐ西域北道のオアシス都市クチャの諸石窟に描かれた天象図にもみいだされる。クチャの石窟壁画については年代観が一定しているとは言えず、絶対年代の指標も発見されていないが、近年、従来の絵画様式に基づく分類と、窟形式や荘厳内容などの考古学的情報を総合的に検討したヴィニャートらによれば、以下に挙げるスーリヤの図像は、いずれも「伝統 B」に含まれる（Vignato&Hiyama2022）<sup>(1)</sup>。またその年代は、クチャが西突厥の支配下に入る 6 世紀後半から 7 世紀前半という目安が示されている（檜山 2013 ほか）。これに従えば、すでにみた敦煌やインドの諸例よりも年代的に遅れることとなる。その表現にはいくつかのバリエーションがあるので確認しておこう。

まず、キジル第 171 窟（図 2-4）、第 34 窟、第 163 窟といった中心柱窟や、シムシム第 30 窟、クムトラ第 23 窟（図 2-5）、第 46 窟ではヴォールト天井の中軸に台座の両端に車輪をあらわした簡素な構造の車に坐するスーリヤを描いている。駕畜はあらわされない。このような挽き手のない車は、クムトラ第 50 窟天井中軸部の「涅槃城」図に描かれるような車箱の正面が大きく開いた車の正面観であり、神通力で虚空を駆ける「天の車」であるという（井上豪 2017）。

他方、キジル第 17 窟ヴォールト天井の中軸部に描かれたスーリヤの戦車は、車輪が消失し、左右へ 1 頭ずつの馬が疾駆する（図 2-6）。左右へ馬が駆け出す様子は莫高窟第 285 窟西壁星宿図のスーリヤの車に共通する。

上記の戦車は駕畜と車輪のどちらかを欠いていたが、どちらも兼ね備えた例もみられる。シムシム第 11 窟およびキジルガハ第 11 窟では 2 つの車輪と左右へ疾駆する馬が描かれる（図 2-7）。クチャにおいては正面性の戦車に描写のバリエーションがある点は興味深いものの、いずれも莫高窟第 285 窟西壁星宿図のスーリヤの車の特徴である 4 頭だて・車輪一つのみという特徴とは合致しない。朱天舒は、正面性の戦車に目を向ければ、キジルの太陽神のイメージはインドのスーリヤと同タイプに属するものの、その他の細部、例えば太陽神の装束などは全く類似しないことから、キジルの太陽神のイメージの源泉はインドではなくイランの直接的な影響であると理解でき、最終的にはヘレニズム芸術にまで遡ると述べる（Zhu 2006）。イランの太陽神像の分析がより肝要となるだろう。

莫高窟第 285 窟西壁にあらわされた日天・月天に類似するスーリヤやチャンドラの図像は、6 世

紀までのインドや中央アジアにみいだされるが、直接の祖型と考えられる例はみられない。すなわち、正面性のスーリヤと一組の馬が左右対称形に広げられた形式は、イランから影響を受けたインド由来のものと考えられ、さらに一つのみの車輪と、敦煌における新たな要素として上端が流線型を描く車箱が組み合わされている。一組の馬が左右対称形に広げられた形式をとる馬車の表現は、インドでは前3世紀ごろからの伝統であるものの、クチャの石窟では車輪のみをあらわし駕畜のいない例や、左右へ疾駆する馬のみが描かれる例などバリエーションがあり、年代は莫高窟 285 窟の例よりも遅れるようである。また、中央アジア以西の図像伝統にも、莫高窟第 285 窟西壁の日天・月天の車に特徴的な、椅子の側板のような形状の車箱はみあたらない。一方で、このような形状の車箱は、中国における漢唐間の車馬図像や車の模型に類例がみいだせる。よって次章では、南北朝の車について検討した前稿を踏まえ、さらに説話図等にあらわされた車の形態に注目することで、椅子形の車の性格について検討しよう。

### 3. 漢唐間の車輿の諸形態

前稿では、魏晉南北朝の墓に副葬される車模型と、墓に描かれた出行図を検討し、当該期の車には主に開放式車と遮蔽式車があり、前者には岡村秀典（2021）が「椅子式車」とする椅子形の車箱をもつ車に加え、側板と較（手すり）が高く、低い袋状の囲いである箒（ちりよけ）を伴う車があることを確認した。開放式であるがゆえに乗員の姿は外からみえている。後者は日本古代の牛車に近い箱型の車で、乗員の姿は遮蔽されてみえない。牛を繫駕する牛車であり、明器としての例が多く知られ、墓室壁画では墓主図像の傍に描くのが定石となるが、ここでは検討しない。開放式車の2種については、敦煌莫高窟など仏教遺跡の図像に多くみいだされるものの、両者の違いや形態的特徴に注目した研究は管見に及ばない。よって、本章では 285 窟の日天・月天にあらわされた椅子形車と、その対比として、側板が高く箒を伴う高較の車について、それぞれがどのように表現されてきたか確認する。

#### （1）椅子形車

##### ① 出行図・明器としてあらわされた椅子形車

明器車や出行図の椅子形車については前稿で検討したため、以下表 1 に示し、その概略を記そう。

a. 後漢～西晋の明器車 陝西西安潘家莊 169 号墓出土の陶車は、椅子形車模型の最も早い例として注目され（図 3-1）、後漢晩期にすでに牛を繫駕するオープンカーが出現していたことの証左となる。西晋の山東鄒城劉宝墓からは側板が流線型を描く椅子形の牛車模型が出土した（図 3-2）。背板がないが、側板の後ろの柱の間に有機質の背板をわたしていた可能性もある。

b. 高句麗壁画出行図の主車 西北朝鮮の十六国期～高句麗の壁画墓には漢の遺制を引き継いだ出行図が数多くみられる。冬寿墓（安岳 3 号墓）東回廊車騎行列図には主車として轎をかけた椅子形車が描かれている（図 3-3）。蘇哲はこの車騎行列を高句麗の車騎行列ではなく東晋ないしは西晋の鹵簿制度を受容した前燕のものであるとした（蘇 2007）。岡村秀典はこれに首肯し、さらに衣冠に着目した近年の研究を引き、主車に乗る人物「聖上」（君主）が三品將軍にして秩二千石の冬寿に合

致する武冠を被っていることを傍証としながら、『晋書』輿服志にいう「通幟車」であると指摘した<sup>(2)</sup>（岡村 2021）。また、薬水里壁画墓前室南車騎行列図は、行列の構成は冬寿墓出行図と共通している。墓室構造が後にみる徳興里壁画墓に類似することから、ほぼ同時期（5 世紀はじめごろ）（岡村 2021）か、やや降る（東 1993）とされる。さらに、徳興里壁画墓前室車騎行列図のうち、東壁中央には 3 台の車がみえ（図 3-4）、行列の進行方向から順に、傍題に「治中別駕」とある側板に高い轆をつけた立乗の車輿・傍題に「使君出遊時」とある椅子式牛車・幟をかけた遮蔽式牛車が進む。

以上 3 例では、墓主と見られる人物をのせた開放式の牛車を中心に、歩兵・騎吏・騎兵がそれを取り囲むように進んでいる状況を描いている。さらに、その主車はともに共通の形状をもち、幟もしくは傘蓋をかけた椅子形の坐乗の車となっている点が特筆される。

c. 十六国～北朝の明器車 十六国期の関中でも椅子形の明器車は出土しており、前秦の草廠坡村 1 号墓や西安焦村 34 号墓の例や、後秦あるいは大夏から北魏初年の墓とされる平陵 1 号墓の例があり（図 3-5）、平陵 1 号墓の椅子式車は馬を繋駕しており特に注目される<sup>(3)</sup>。

北朝期には、北魏初期の彭陽新集石窰村 1 号墓や北魏平城期の宋紹祖墓（大同雁北師院 5 号墓）で椅子形牛車 1 台が出土している（図 3-6）。北魏晩期の王温墓からは椅子式の陶車 1 台が出土している。側板の上端が曲線を描かず、高い。韋輝和墓（西安南郊 4 号墓）・韋乾墓（西安南郊 5 号墓）からは、それぞれ椅子形車 1 体が出土している。韋輝和墓の椅子式車は背板をもち、車輪の轂の周りに蓮華紋を表す。磁県湾漳大墓では、椅子形車を含む陶車が 9 台出土しており、3 頭だて馬車 4 台と 1 頭だて馬車 2 台、牛車 3 台に復元される（岡村 2021）（図 3-7）。当該墓はその規模から北齊文宣帝高洋墓の武寧陵に比定されており（中国社会科学院考古研究所ほか 2003）、皇帝陵の明器に椅子式車が含まれること、それを馬が牽いたとみられることは重要である。

以上のように、後漢代には図像や模型としてあらわれる椅子形の車は、その後の威儀を備えた出行行列の中核として珍重され、北齊の皇帝乗輿まで地位を高めていたと考えられる。前稿ではさらに正史の記述から、その車は北魏太和年間に制定された太和五輅を象っている可能性を指摘し、領地への盛んな行幸を繰り返す「動く皇帝」<sup>(4)</sup>であった北魏皇帝に、辺境を巡る異民族統御官<sup>(5)</sup>が用いた車が珍重された結果ではないかと推測した。

以下では、孝子伝図や仏教説話など、説話図中にあらわされた車の形態を確認することで、その性格がどのようなものであったかをさらに検討していこう。

## ② 説話図にあらわれる椅子形の乗り物

a. 孝子伝図 司馬金龍墓出土漆画屏風の班姬辞図には漢成帝の輦として側板の上端が流線形を描く椅子形の乗り物が描かれている（図 4-1）。従来、本図は伝顧愷之『女史箴図巻』との共通性が指摘されていたが、韋らは両者の差異に注目し、『女史箴図』からの直接の影響関係がなく、北方の魏晋の絵画や技術がそのまま保持された結果の所産であると論じた（韋・馬 2018）。『女史箴図巻』の輦が遮蔽式の乗り物である一方で、本例は開放式で椅子形の乗り物である。まさにそれぞれの時代・地域の皇帝輦の実態を映しているとも考えられる。

表 1. 明器・出行図主車としての椅子形車

遺跡	資料	墓誌等に記載の身分	年代	出典
西安潘家庄 169号墓	陶牛車		魏西魏期	西安市文物保護考古所2008
鄒城劉宝墓	陶牛車	(西晋) 侍中使持節安北大將軍加護烏丸校尉都督幽并州諸軍事國內侯	永寧2年(301)	山東鄒城市文物局2005
冬寿墓(安長3号墓)	東回廊車騎行列図	使持節都督諸軍事平東將軍護無南校尉兼南郡昌黎文安東方太守基昌侯	永明13年(357) 卒	『朝鮮遺跡遺物図説』編輯委員会1900
南浦京水型壁画墓	前室南車騎行列図		5世紀初	科学院考古学及民俗学研究所1963
南浦德興里壁画墓(呈納墓)	前室車騎行列図	建威將軍西小大兄左行軍監驍行軍遼東太守使持節東夷校尉幽州刺史	永業18年(408) 卒	朝鮮民主主義人民共和国社会科学院編5編1986
咸陽草廠坡村1号墓	陶牛車		前秦	陕西省文物管理委员会1959
西安焦村34号墓	陶車		前秦	西安市文物保護考古研究所2023
咸陽平陵1号墓	陶馬車		後秦/大夏~北魏初	咸陽市文物考古研究所2003
志陽新集石崖村1号墓	陶牛車		北魏初	寧夏回族自治區博物館1988
大同宋舒墓	陶牛車	(北魏) 南州刺史侯景公	太和元年(477)	大同市考古研究所 2008
洛陽王福墓	陶車	(北魏) 使持節無軍行軍臨州刺史	大昌元年(532) 葬	洛陽市文物工作隊1995
西安草廠和墓	陶車	(北魏) 日南校尉尚書	永樂2年(533) 葬	西安市文物保護考古所2009
西安草廠墓	陶車		永樂3年(534) 葬	西安市文物保護考古所2009
磁州灣大墓	陶馬車・陶牛車		北齊	中国社会科学院考古研究所110・2003

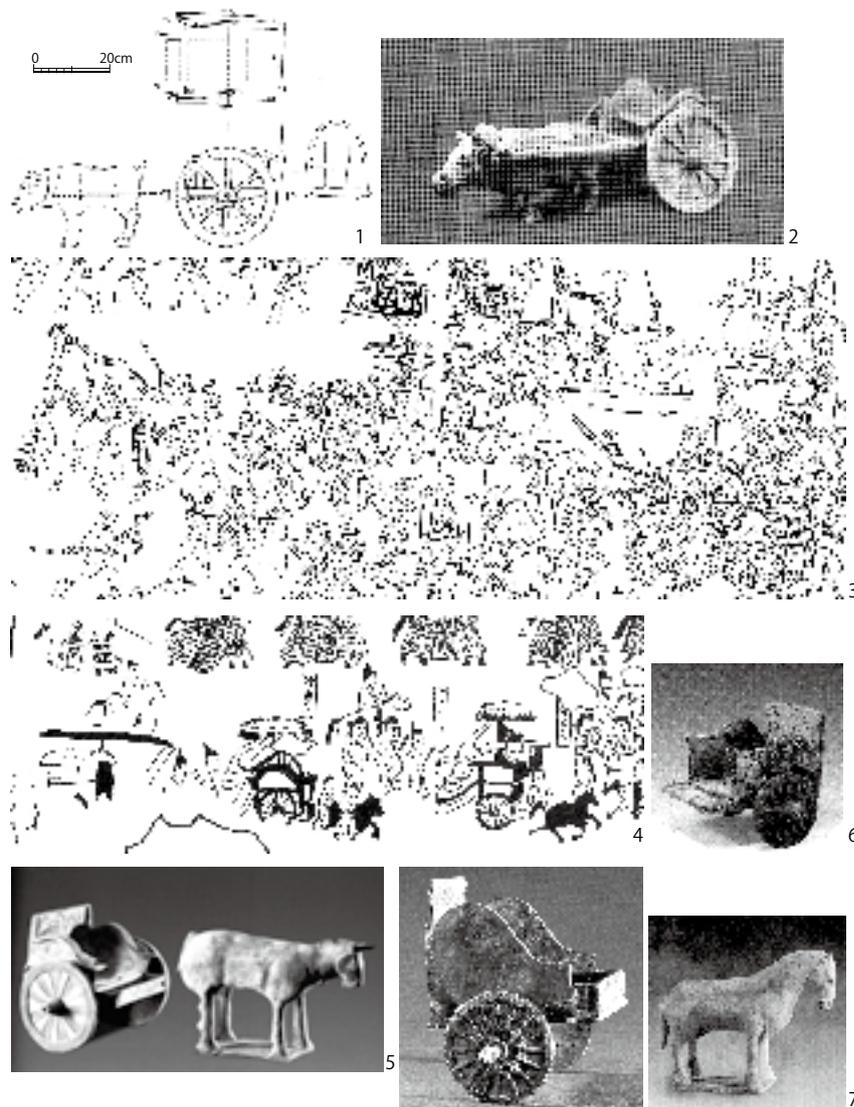


図 3. 出行図・明器としてあらわされた椅子形車

1. 陝西西安潘家庄 169 号墓明器牛車 2. 山東鄒城劉宝墓明器牛車 3. 冬寿墓東回廊車騎行列図 4. 德興里壁画墓前室車騎行列図 5. 平陵 1 号墓明器馬車 6. 宋紹祖墓明器牛車 7. 河北磁州灣漳大墓明器車、駕馬模型

カンサス市ネルソン美術館石床董永図（人文研蔵拓、図 4-2）は、劉向『孝子伝』ほかにみえる董永伝をあらわしたものと解釈される。木陰に停めた「鹿車」<sup>(6)</sup>に老いた父を休ませ、農作業に勤しむ董永が描かれる。鹿車は 2 輪に加え車箱の前方に 1 輪のある 3 輪の荷車だが、荷台部分は側板の上端が流線形を描く椅子形を呈しており、荷台だけをみれば荷車には似ても似つかない。人の乗り物に寄せた表現であろう。長廣敏雄（1969）は北齊ごろの年代を提示している。また同じ画題の例が長廣の掲出する C.T.Loo 旧蔵画像石の孝子伝図（董永図）にみえる。北魏の石床とされる画像石で、老父の鹿車は

背板が高い 3 輪の椅子形車となっている。

b. 仏教説話図 東魏武定元年（543）造像碑スダナ太子本生図馬車には、「随太子乞馬時」と題し、太子が乗り込もうとする一頭の馬を駕する双轅車があらわされる。車は側板の上端が流線形を描く椅子形の車で、傘蓋がかけられている（図 4-3）。本例を挙げて岡村は「椅子形の乗り物が皇帝をはじめとする上位貴族に用いられていたことは確かであろう」とする（岡村 2021）。

なお、敦煌莫高窟第 428 窟東壁（北周、図 4-4）、第 419 窟人字坡東側（隋）にも同様の画題がみえており、太子が乗り込もうとする馬車として椅子形の車が描かれる。そのほか、第 290 窟（北周）では仏伝図中に釈迦の降誕によって天から下された瑞祥のうちの宝車として、傘蓋のある椅子形の車がみえており（図 4-5）、第 420 窟（隋）、第 419 窟（隋）では法華経変相の火宅三車の場面に、宝物を載せた車として幟をかけた椅子形の車が描かれるなど、莫高窟の北周から隋の諸窟にも椅子形車はみえている。

### ③ 神仙図における椅子形車

唐長樂公主墓の東西の墓道壁画では、椅子形の車に乗る神仙が儀衛を先導している。東西壁それぞれに 2 台の双轅椅子形車が並走し、各車一頭の馬を駕し、雲の上を進む（雲中車馬図、図 4-7）。車の後方には柴戟を立て、虎頭魚身の「鯨」もしくは「鯢」が追従している。車に車輪はなく、まさに

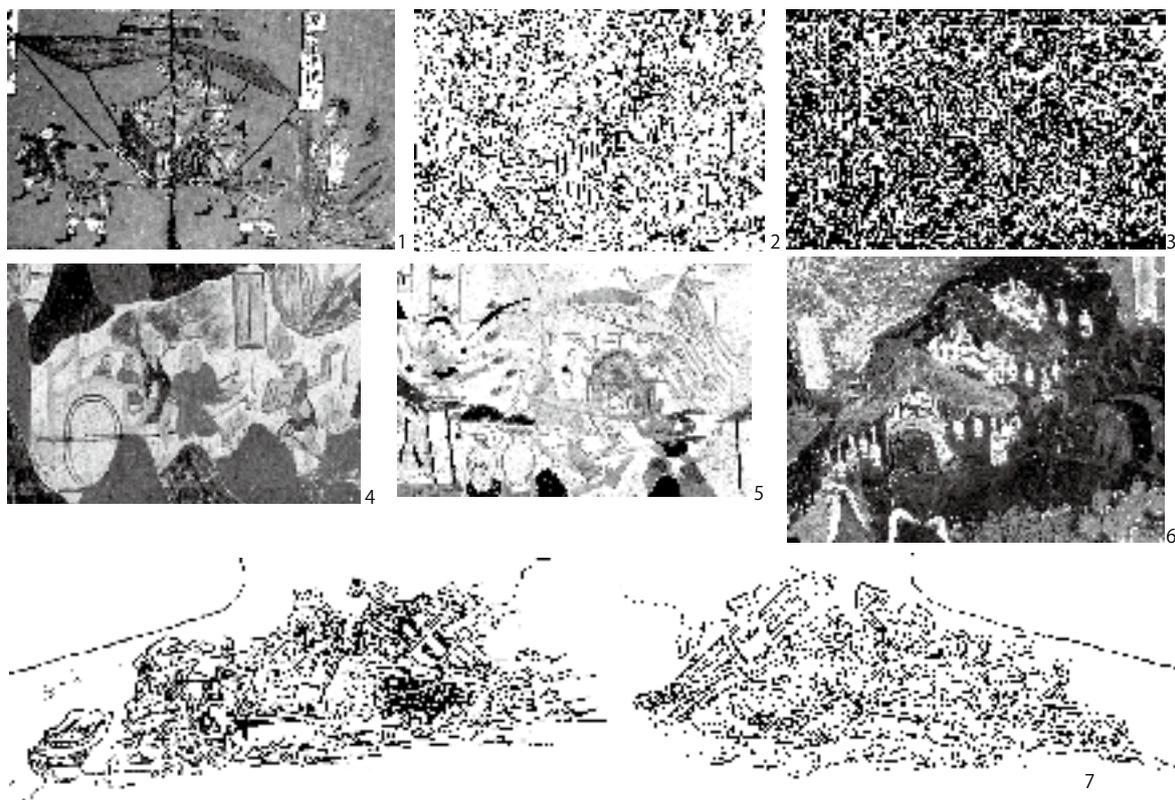


図 4. 説話図にあらわれる椅子形の乗り物

1. 司馬金龍墓漆画屏風輦 2. カンサス市ネルソン美術館石床董永図鹿車 3. 東魏武定元年造像碑スダナ太子本生図馬車 4. 敦煌莫高窟第 428 窟東壁スダナ太子本生図馬車 5. 敦煌莫高窟第 290 窟仏伝図馬車 6. 敦煌莫高窟第 419 窟法華経変相（三車） 7. 長樂公主墓雲中車馬図（左：墓道西壁右：墓道東壁）

雲中を進む神仙の車である。早くから伝顧愷之「洛神賦図巻」（宋代の模本）に描かれた洛神の乗り物との共通性が指摘されているが（程 2006 ほか）、車箱の形状と駕畜は異なる。また乗車する人物は蓮華冠を戴いた道教の神仙であると考証されている（于 2014）。

このように、北魏皇帝の乗輿として一世を風靡した椅子形車は、北周～唐の明器や出行図に存在が確認できないが、説話図に皇帝や太子の乗り物として描かれるほか、宝物や神仙を載せる乗り物としても登場することが明らかになった。別形状の車と対比することで性格がより明瞭に理解できることと思う。以下では北魏の頃には椅子形車と併存していたと思しい高較の車を取り上げることで、比較していきたい。

## （2）北周～唐の高較の車

### ① 明器・出行図にあらわされた高較の車

宇文鴻漸墓では、墓室から、側板が高く上端に耳をもち、前面に笮のある陶車が出土している（図 5-1）。前面に笮を設け、側板の上端が水平になり、側板と同じ高さの背板を伴う点に特徴がある。鞍を伴わない陶馬が 4 体出土しており、駕馬模型の可能性もある。また柳帯韋墓の墓室から、宇文鴻漸墓出土陶車と同様の、側板が高く、側板の上端に耳をもち、前面に笮のある陶車が出土している（図 5-3）。轆は伴わないが、前面の中央にホゾが設けられているため、有機質の轆を一本取り付けた単轆車であったかもしれない。鞍を伴わない陶馬が 3 体出土しており、その中の一体には頸部に軛のような構造と孔が設けられているので、少なくともこの陶馬に関しては駕馬模型と考えられる（図 5-2）。

唐高宗の乾陵の陪葬墓のひとつである懿徳太子墓墓道に描かれた出行準備図には、東西にそれぞれ 3 台の車が描かれており（図 5-4）、形状は上記の北周墓から出土した高較の明器車に共通する。車の後方に立てた檠戟の形状から、唐の皇太子金輅であると考証される（李 2004）。

唐中宗の定陵の陪葬墓のひとつである節愍太子墓からも同様の明器車が 6 体出土している（図 5-5）。ただし較は前方に長く突き出し、その下に耳が設けられている。共伴する陶小馬 4 点は駕馬であろう。轆がどう取り付いていたのか読み取れないが、いずれも一馬を駕する双轆車であるとされる。

以上の北周から唐の明器車や出行準備図をみていると、前代の 2 例にも車の形状に共通性がみいだされる。先にみた徳興里壁画墓前室車騎行列図のうち、主車の前をゆく「治中別駕」馬車は、笮がみえないものの、高い側板と較が共通する。また大同沙嶺 7 号墓には、墓室北壁に壮大な出行図が描かれ（大同市考古研究所 2006）、主車は傘蓋を立てた 4 頭だての馬車である。側板の形状は明瞭ではないものの、車箱の前部に笮をもつ。墓室から出土した多量の漆器片には銘文がみえ、被葬者は「侍中主客尚書領太子少保平西大將軍」の息子をもつ女性であり、太延元年（435）に埋葬されたと考証されている（趙・劉 2006）。

このように、北周墓に特徴的な高較の車は、馬を繫駕した可能性が高く、唐の皇太子の車としてもあらわれている。北周の華北統一後、隋ははじめ北齊の皇帝乗輿を用いたが、開皇年間には車制をあらためているので（前稿）、新たな乗輿は椅子形ではなく高較の車となった可能性が高い。

## ② 説話図にあらわれる高較の乗り物

a. 孝子伝図 カンサス市ネルソン美術館蔵石棺の董永図は、(1) ② a で挙げた董永図と同じ場面をあらわしたもののだが、老父の坐る鹿車は側板が高く耳を生じた高較の車として描かれる（図 5-6）。刻銘の書体は 520 年代とみても良いが、画風は他の北魏石刻から飛び離れているので 6 世紀中頃、大雑把に北齊のころのものとしてされる（長廣 1969）。また隋の麴慶夫婦墓出土石屏風蘇太子車馬図は、銘文から明らかであるように、蘇の国の太子の孝行物語を描いている（図 5-7）。南北朝後半期に代表的な孝子譚のひとつであったと考えられる（小南 2023）。車輪に蛇が巻きついた蘇の太子の車は、4 馬を繋駕する高較の車で、双轅の間に 2 頭の服馬が繋がれている点は写実性が疑わしいが、車箱の形状は上記に共通する。

b. 仏教説話図 麦積山第 127 窟シューヤマ本生では、狩猟に出る迦夷国王を待つ輅として登場し、サッタ太子本生にも大車国王の輅として描かれる（図 5-8）。本窟の壁画は長安から派遣された画工集団が手掛けた可能性が指摘され（東山 1992）、西魏代前半に編年される（八木 2013）。また敦煌莫高窟第 423 窟（隋）人字坡東のスタナ太子本生では、太子の車として高較の車が登場している。さらに第 420 窟（隋）では、窟頂西面法華経変相（序品）に釈迦仏と日月燈明の菩薩や信者による施物として駕 4 の高較の車が 2 台みえる。同窟の法華経変「火宅喻」に牛車としても描かれる（図 5-9）。盛唐の第 148 窟では、涅槃経変にアジャセ王の車として四馬を駕する高較の車が登場している（図 5-10）。こちらは隋までの定型化された角度ではなく、やや俯瞰で描かれており、形態が懿徳太子墓壁画の高較の車に近い。おそらく同時代の実際の車を手本に描かれたものだろう。

c. 神仙の車 前出の麦積山第 127 窟では龍車・鳳車としても同様の車が登場するが、これは東王公が天空に遊ぶ既成の様式を借用して帝釈天・帝釈天妃をあらわしているという（天水麦積山石窟芸術研究所編 1987）。また莫高窟第 249 窟（北魏孝昌元年（525）以前から西魏大統十一年（545）ごろ）ほかに同様の描写が繰り返しみられる（図 5-11）。麦積山第 127 窟と同様に帝釈天龍車・帝釈天妃鳳車であるとする説や（田中 2003）、東王父・西王母であるとする説などがあり（稲本 2013）、それらのハイブリッドイメージであるとも考証されている（檜山 2022）。いずれにせよ粉本を同じくするものであろう。

このように、いわば第二の形態のオープンカーとしての高較の車は、西北朝鮮ですでに椅子形の車と共存していたと考えられる。笞と耳を伴う形態は秦漢代以来の戦車に近いが、較の位置は乗員が隠れるほどに高い。北周の貴族墓から模型が出土しており、唐代の太子墓にもあらわれていることから、隋開皇年間の車制改革によって皇帝・皇太子の乗輿となった可能性が高い。説話図には椅子形車と同様に太子や国王の車として登場し、宝物を載せた車としても描かれているが、駕畜は馬、しかも 4 頭とされることが多い。説話図については、両者の選択やその目的を明らかにできないが、神仙の車としては敦煌莫高窟で東王父・西王母（もしくは帝釈天・帝釈天妃）の車として定型化しており、伝顧愷之『洛神賦図巻』の影響が示唆されるように、実際の車を象ったというよりは絵画表現として伝えられたものかもしれない。

表2. 明器・出行図主車としての高較の車

遺跡	資料	墓誌等に記載の身分	年代	出典
西安宇文邕墓	陶馬車	(北周) 開府儀同三司瓜州刺史襄城公	建德元年(572) 葬	西安市文物保護考古研究院ほか2021
西安柳帶墓	陶馬車	(北周) 使持節上開府儀同大將軍并州司會贈新達楚三州諸軍事新州刺史康城侯公	建德6年(577) 葬	西安市文物保護考古研究院2020
懿德太子李重潤墓	墓道出行準備圖	(唐) 懿德太子	神龍2年(706) 改葬	陝西省考古研究院ほか2016
節愍太子李重俊墓	陶馬車	(唐) 節愍太子	景雲元年(710) 葬	陝西省考古研究所ほか2004



図5. 北周～唐の高較の車

1. 宇文鴻漸墓明器馬車
- 2, 3. 柳帶韋墓明器馬車
4. 懿德太子墓墓道西壁出行準備圖
5. 節愍太子墓明器馬車
6. カンサス市ネルソン美術館蔵石棺(董永図) 鹿車
7. 麴慶夫婦墓出土石屏風蘇太子車馬図
8. 麦積山第127窟シュヤマ本生図馬車
9. 敦煌莫高窟第420窟法華經變相(序品)
10. 敦煌莫高窟第148窟涅槃經變馬車
11. 敦煌莫高窟第249窟西王母鳳車

#### 4. むすびにかえて

以上、莫高窟第 285 窟の日天の戦車から出発し、漢唐間の画像に見える 2 つの形態のオープンカーについて眺めてきた。その結果、特に説話図については、両者の選択やその目的を明らかにできず、課題が残る。今後、各図の粉本の系譜などを詳細に検討することで椅子形車と高輦の車の差異を明らかにできるかもしれない。前稿を踏まえ、これまでの内容をいま一度まとめれば、北魏太和五輦とそれを引き継ぐ北齊の皇帝乗輿では椅子形の車箱を採用したが、それは各種説話図のほか、輦や鹿車そして神仙の乗る車としても表現されていることが明らかとなった。一方、西魏の麦積山第 127 窟では仏伝説話中の王の車に輦（手すり）の高い車を採用し、また同時代から隋代にかけての敦煌でも東王父・西王母（もしくは帝釈天・帝釈天妃）の車として繰り返し描かれた。隋代の説話図にも同じ車がみえている。重要なのは、同様の車が唐代の太子墓において模型明器や出行準備図に表現されていることである。同じ特徴をもつ車が北魏平城期の出行図にも描かれていることから、周制にかなった車として再評価され、唐代へ引き継がれたのであろう。一方で、椅子形の車は北齊の滅亡後に北周に取得され、隋大業年間まで皇帝乗輿として継承されていたと考えられるため、漢制を体現した（と思われる）車として一定期間珍重されたと推測される。

ここで再び莫高窟第 285 窟の日天に戻ろう。檜山（2020）は 285 窟西壁星宿図に関連の深いテキストとして『大方等大集経』の「日蔵分」および「月蔵分」を挙げ、「月蔵分」には日天と月天が「乗車疾行」し天空を巡回しているため仏陀の大集会に参加できないとする記述があることを示し<sup>(7)</sup>、星宿図およびその下の力士や菩薩形の天人は、このような様子をあらわしている可能性を指摘している。つまり、莫高窟第 285 窟の日天・月天の乗る椅子形の車は、意図的に異民族統御官の象徴であった車を借用したものであると考えられる。それは領地を巡行するための戦車であり、椅子形の戦車に乗った北魏皇帝が動く皇帝であったこともそれを裏付ける。天空を巡回する日天・月天のイメージに重ねられて描かれたのだろう。はたして、ギリシャの神格化された乗り物としての 4 頭だて馬車と、巡回する北魏皇帝の乗輿のイメージは、西魏の時代に敦煌にて出会い、融合したと解釈できよう。

本稿をなすにあたり、とくに第 2 章の執筆の過程では檜山智美氏の懇切丁寧なご指導を賜った。末筆ながら記して感謝申し上げる次第である。本稿は JSPS 科研費課題 23KJ1156 の成果の一部である。

#### 註

- (1) 絵画の様式はほぼヴァルトシュミット (Waldschmidt 1933) の第二インド・イラン様式にあたり、さらに顔料や窟形式などの考古学的痕跡を総合的に分析して「伝統 B」に分期した。先行する「伝統 A」石窟群の壁画が説一切有部系の説話にもとづくのに対し、根本説一切有部系説話と符合する主題・細部描写が多いと論じる。
- (2) 墓内には墓主画像を含む様々な場面が描かれており、各方面の研究者が墓主やその職位、墳墓造営の背

景について議論をおこなってきた(宿白 1952、岡崎 1964、東 1993、井上直 2007 ほか)。

- (3) 関中の十六国墓の年代については辛龍編年(辛 2018)に依拠する。
- (4) 北魏皇帝は頻繁な行幸を繰り返し(佐藤 1984)、北齊皇帝は副都の晋陽への頻繁な行幸を行い、治世の半分近くを晋陽で過ごす動く皇帝であった(藤井 2005)。
- (5) 五胡十六国における該当する官職を詳細に論じた三崎良章が提示する名称である。西晋の并州・幽州の地には匈奴・烏桓(烏丸)・鮮卑などが散居しており、その統御の機関として烏桓校尉などの異民族統御官が置かれた。前燕や後秦は独立以前には晋に冊封して異民族統御官を含む官爵号を与えられ、前秦は最初、前趙・後趙に服属して軍事権を与えられていた。後に独立して独自の官僚機構を整備すると、周辺勢力の君長に異民族統治官を授けた(三崎 1995)。
- (6) 『太平御覧』車部四・鹿車の引く応劬『風俗通』に「鹿車、窄小裁容一鹿也」とある小さな車である。本図の鹿車は三輪車であり、轆や駕畜はみえない。
- (7) 『大方等大集經』「月藏分第十二提頭頼吒天王護 持品第十一」(大正藏第 13 卷、346 中～下)「彼日天子月天子。遙禮佛足作如是言。我等既是乘車疾行。不得往詣彼大集所」

#### 参考文献

- 東 潮 1993 「朝鮮三国時代における横穴式石室墳の出現と展開」『国立民俗博物館研究報告』第 47 集
- 章 正・馬 銘悦 2018 「司馬金龍墓屏風漆画散論」『西部考古』第 16 輯
- 稲本泰生 2013 「敦煌第 249・285 窟における神々の図像の意義」『美術史歴参 百橋明穂先生退職記念献呈論文集』中央公論美術出版社
- 井上 豪 2017 「キジル石窟ヴォールト天井壁画における天空の表現」宮治昭責任編集『アジア仏教美術館論集 中央アジア I ガンダーラ～東西トルキスタン』中央公論美術出版
- 井上直樹 2007 「集安出土文字資料からみた高句麗の支配体制についての一考察 —安岳三号墳・徳興里古墳にみえる被葬者の職位の再検討と府官制—」『朝鮮学報』第 203 輯(井上直樹 2021 『高句麗の史的展開過程と東アジア』塙書房に収録)
- 于 静芳 2014 「唐長樂公主墓壁画『雲中車馬図』考」『美術与设计』2014 年第 5 期
- 偃師商城博物館 1993 「河南偃師兩座北魏墓発掘簡報」『考古』1993 年第 5 期
- 大平理紗 2025 (予定) 「車輿と馬珂 —魏晋南北朝期の騎乗用裝飾馬からの照射」『東洋史研究』第 84 巻第 1 号
- 岡崎 敬 1964 「安岳三号墳(冬寿墓)の研究 —その壁画と墓誌銘を中心として—」『史淵』第 93 輯
- 岡田 健・劉 永増編 2001a 『敦煌石窟』3 文化出版局
- 岡田 健・劉 永増編 2001b 『敦煌石窟』4 文化出版局
- 岡村秀典 2021 『東アジア古代の車社会史』臨川書店
- 賀 世哲 1990 「敦煌莫高窟第 285 窟西壁内容考釈」『敦煌石窟研究国際討論会文集』石窟考古、遼寧美術出版社
- 咸陽市文物考古研究所 2006 『咸陽十六国墓』文物出版社
- 小南一郎 2023 「宋遼金元代の壁画墓と二十四孝説話の形成(下)」『泉屋博古館紀要』第 39 巻
- 佐藤智水 1984 「北魏皇帝の行幸について」『岡山大学文学部紀要』第 5 号
- 山東鄒城市文物局 2005 「山東鄒城西晋劉宝墓」『文物』2005 年第 1 期
- 宿 白 1952 「朝鮮安岳所発現的冬寿墓」『文物参考資料』1952 年第 1 期
- 昭陵博物館 1988 「唐昭陵長樂公主墓」『文博』1988 年第 3 期
- 新疆ウイグル自治区文物管理委員会・拜城県キジル千仏洞文物保管所編 1983 『中国石窟 キジル石窟』第 1 巻

平凡社

- 辛 龍 2018 「関中地区十六国墓葬年代問題的再研究」『考古与文物』2018 年第 4 期
- 菅谷文則 2000 「晋の威儀と武器について」『古代武器研究 1』古代武器研究会
- 西安市文物保護考古研究院 2023 「陝西西安焦村十六国墓 M34 発掘簡報」『考古与文物』2023 年第 2 期
- 西安市文物保護考古研究院 2020 「陝西西安北周康城愷公柳带草墓発掘簡報」『文博』2020 年第 5 期
- 西安市文物保護考古研究院・西北大学文化遺産学院 2023 「西安長安区北周宇文鴻漸・宇文吉甫墓発掘簡報」『文物』2023 年第 6 期
- 西安市文物保護考古所 2008 「西安南郊潘家莊 169 号東漢墓発掘簡報」『文物』2008 年第 6 期
- 西安市文物保護考古所 2009 「西安南郊北魏北周墓発掘簡報」『文物』2009 年第 5 期
- 陝西省考古研究院・乾陵博物館編著 2016 『唐懿德太子墓発掘報告』科学出版社
- 陝西省考古研究所・富平県文物管理委員会編 2004 『唐節愨太子墓発掘報告』科学出版社
- 陝西省文物管理委員会 1959 「西安南郊草廠坡村北朝墓の発掘」『考古』1959 年第 6 期
- 蘇 哲 2007 『魏晉南北朝壁画墓の世界—絵に描かれた群雄割拠と民族移動の時代』白帝社
- 大同市考古研究所 2006 「山西大同沙嶺北魏壁画墓発掘簡報」『文物』2006 年第 10 期
- 大同市考古研究所 2008 『大同雁北師院北魏墓群』文物出版社
- 武田幸男 1989 「徳興里壁画古墳被葬者の出自と経歴」『朝鮮学報』第 130 輯
- 田中知佐子 2003 「敦煌莫高窟の「龍車・鳳車図」について」『仏教芸術』269 号
- 中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所編 2003 『磁県湾漳北朝壁画墓』科学出版社
- 中国新疆壁画芸術編輯委員会編 2009 『中国新疆壁画芸術』新疆美術攝影出版社
- 中国敦煌壁画全集編輯委員会編 1989~2006 『中国敦煌壁画全集』天津人民美術出版社
- 中国美術全集編輯委員会編 1986 『中国美術全集 絵画編』1 人民美術出版社
- 趙 瑞民・劉 俊喜 2006 「大同沙嶺北魏壁画墓出土漆皮文字考」『文物』2006 年第 10 期
- 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編 1986 『徳興里高句麗壁画古墳』講談社
- 程 義 2006 「長楽公主墓雲中車馬図試釈」『乾陵文化研究』(二)
- 天水麦積山石窟芸術研究所編 1987 『中国石窟 麦積山石窟』平凡社
- 長廣敏雄 1969 『六朝時代美術の研究』美術出版社
- 寧夏固原博物館 1988 「彭陽新集北魏墓」『文物』1988 年第 9 期
- 東山健吾 1992 「麦積山石窟の草創と仏像の流れ」『中国麦積山石窟展』日本經濟新聞社
- 肥塚 隆・宮治昭責任編集 2000 『世界美術大全集 東洋編』第 13 卷、小学館
- 檜山智美 2013 「クチャの第一様式壁画に見られるエフタル期のモチーフについて」『ガンダーラ・クチャの仏教と美術：シルクロードの仏教文化—ガンダーラ・クチャ・トルファン』第 1 部
- 檜山智美 2020 「敦煌莫高窟第 285 窟西壁壁画に見られる星宿図像と石窟全体の構想について」『仏教芸術』第 5 号
- 檜山智美 2022 「西魏時代の敦煌莫高窟に見られる習合的図像表現について—第二四九・二八五窟の壁画に用いられた「ハイブリッド・イメージ」を中心に」木俣元一・近本謙介編 『宗教遺産テキスト学の創成』勉誠出版
- 藤井律之 2005 「北朝皇帝の行幸」『国家形成の比較研究』学生社
- 三崎良章 1995 「異民族統御官にあらわれた五胡諸国の民族観」『東洋史研究』第 54 第 1 号（『五胡十六国の基礎的研究』汲古書院、2006 年に再録）

- 宮治 昭 2010 「太陽神スーリヤの図像について」『インド仏教美術史論』中央公論美術出版（『仏教芸術』156号 1984年に初出）
- 洛陽市文物工作隊 1995 「洛陽孟津北陳村北魏壁画墓」『文物』1995年第8期
- 李 星明 2004 『唐代墓室壁画研究』陝西人民美術出版社
- 龍谷大学龍谷ミュージアム・三井記念美術館編 2024 『特別展「文明の十字路・バーミヤン大仏の太陽神と弥勒信仰 ガンダーラから日本へ」』龍谷大学龍谷ミュージアム・三井記念美術館・京都新聞
- 八木春生 2013 『中国仏教造像の変容 南北朝後期および隋時代』宝蔵館
- 《조선유적유물도감》편찬위원회 (『朝鮮遺跡遺物図鑑』編纂委員会 1990『조선유적유물도감 (朝鮮遺跡遺物図鑑)』5 고구려편 (高句麗篇)3
- 과학원 고고학 및 민속학 연구소 (科学院考古学及民俗学研究所)1963『각지 유적 정리 보고 (各地遺跡 整理報告)』과학원 출판사
- Frenger, Marion, 2020. The Sun in Stone—Early Anthropomorphic Imagery of Surya in North India. In: *N.T.M.* 28.
- Gail, Adalbert J., 1978. Der Sonnenkult im alten Indien—Eigengewächs oder Import? *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 128-2.
- Goldman, Bernard, 1988. The Celestial Chariot East and West. In: *Bulletin of the Asia Institute, New series Vol.2*
- Joshi, N.P., 1972. *Catalogue of the Brahmanical Sculptures in the State Museum, Lucknow. Part 1*, Lucknow: the State Museum.
- Markel, Stephen, 1995. *Origins of the Indian Planetary Deities*. New York: Edwin Mellen Press.
- Vignato, Guiseppe & Hiyama, Satomi, 2022. *Traces of the Sarvāstivādins in the Buddhist Monasteries of Kucha*. New Delhi: Dev Publishers&Distributors.
- Waldschmidt, Ernst, 1933. Über den Stil der Wandgemälde. In: Le Coq, Albert von / Waldschmidt, Ernst, *Die buddhistische Spätantike in Mittelasien VII*, Neue Bildwerke 3. Berlin: Reimer und Vohsen
- Zhu, Tianshu, 2006. The Sun God and the Wind Deity at Kizil. In: *Eran ud Aneran. Studies Presented to Boris Il'ic Marsak on the Occasion of His 70th Birthday*. Venezia: Cafoscarina.

#### 図表出典

- 図1. 1~4: 中国敦煌壁画全集編輯委員会編 1989~2006 (以下、「全集」)
- 図2. 1~3, 5: 中国新疆壁画芸術編輯委員会編 2009 4: 新疆ウイグル自治区文物管理委員会ほか 1983  
6: 肥塚・宮治編 2000 7: 龍谷大学龍谷ミュージアムほか 2024 8: Joshi 1972
- 図3. 1, 2, 5-8: 各報告書・簡報 3: 菅谷 2000 4: 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院ほか編 1986
- 図4. 1, 5: 中国美術全集編輯委員会編 1986 2, 3: 長廣 1969 4: 岡田・劉編 2001a  
6, 7: 岡田・劉編 2001b 8: 昭陵博物館 1988
- 図5. 1~5, 7: 各報告書・簡報 6: 中国美術全集編輯委員会編 1986  
8: 天水麦積山石窟芸術研究所編 1987 9: 岡田・劉編 2001b 10, 11: 全集